

元福岡教育大 平田 昌 東筑紫短大○花崎正子
西九州大家政 河野孝子 佐賀大教育 赤星礼子

我々は、「九州における高齢者の生活実態—佐賀県伊万里市大川町における—」第1報、第2報、第3報、第4報を、それぞれ、第37回日本家政学会研究大会(裕昭知女子大)、第38回同大会(於岡山大学)で発表した。その分析を可及める中で、今日、あらためて、実証的研究としての「調査」等において、家政学としての基本視点と、それにもとづく理論枠組と解析、おなわち、方法論的不十分さのあることを痛感した。そこで、我々は、再び「理論考究」へのフィードバックを試み、この第1報として、「〔生活〕探求への一試論—家政学における方法論的整備にむけて—(その1)問題の所在」を、第33回日本家政学会九州支部大会(昭和61年11月、於佐賀女子短大)で発表した。それに引き続く今回の報告である。

「(その1)問題の所在」としては、〔生活〕探求の方法論にかかわる基本問題として、「家政学の認識方法にもとづく認識対象」について、まず、大枠的に概観した。おなわち、今日の家政学の共通認識指標を公に示したと解される「家政学将来構想1984」(昭和59年)においても、家政学の認識対象については、必ずしも明確な共通認識提示には至らず、多くの未解決、未整理部分を残している。例えば、「人間の生活」「家庭生活」「家政」等、形式的な語表現においては勿論のこと、認識方法にもとづく対象論への展開はない。

今日、家政学研究者の共通理解に寄与する「認識対象論」としては、少なくとも、方法論的模索が必要であり、それは、大きな課題として残されている。今回は、「その2」として、上記にもとづき、認識対象としての「家政」をとりあげ、その解析を試みようとするのである。